

美香ちゃん

発行：青木美香後援会
事務局：観測船「ふじ」内
編集責任：小元久仁夫

座談会

「後援会の将来について」

二月二日 「ふじ船内にて」

【出席者】

小元久仁夫（現会長）
鈴木 裕（前会長）
村上捷征（前事務局長）
安藤久男（自称後援会黒幕）
木村征男（会員）
蜂須賀弘久（"）
近藤五郎（"）
【司会】
成瀬廉二（現事務局長）

成瀬

「昨年、十次隊の越冬成立直後に、青木美香後援会が昭和基地に発足して、その後なんとなく順調に続いてきました。この後援会は、後援する人と後援される人が一度も顔を合わせたことがなく、両者

の間の連絡は電報だけという非常に特殊な性格を持っていました。

今、我々は昭和基地を離れて日本へ向かいつつあるわけですが、後援会を昭和基地に残して置くべきであるとか、我々が日本へ持って帰って続けるべきであるとか、いろいろな意見がありながら、現在のところ結論は出ていません。

今日は、この後援会の将来を如何にもっていくべきか、或いは今後どのような形で青木美香さんをバックアップしていくべきか、という点を中心にして話し合っ頂きたいと思えます。この座談会で話し合われた事を一つの試案として、いずれ後援会総会で検討の上決定していきたいと考えています。

ではまず、後援会とは何をすることであるのか、という点から村上さんどうぞ。」

村上

「普通の町の後援会は会員に特権を与えて、人気ある芸能人などをバックアップするものです。でも、青木美香後援会は別な観点からやらなければならぬ。」

木村

「タレントという人は非常に多い。皆売り出しを

図っている。青木美香は南極では非常に名が売れている。しかし、残念ながら日本ではあまり聞かない。我々と青木美香とは、特殊なつながりがある。だから、後援会は南極関係者を中心にすべきだと思う。」

村上

「普通の後援会と同じようなものにしたいんですか？
会長さん。」

小元

「ええ、まあ、それは後で。皆さんの意見を伺ってから。」

村上

「問題は、普通の後援会のようなものにするか、二九人のものにするかどうかですね。」

蜂須賀

「美香ちゃんの声の便りに対して、美香ちゃんありがとう、という感謝の気持ちでスタートしたと思う。決して美香ちゃんを有名なタレントにしようという気持ちはなかった。ワシは、少なくとも二九人は、美香ちゃんを最後まで、奥さんになっても、応援していく姿勢をくずしてはあかんと思う。」

小元

「私は、初代会長を引き受けた時は、純粋な精神的バックアップのつもりでした。」

安藤

「まだ見てへん人の後援会だから、本当に純粋だと思う。本当は、後援会事務局を昭和基地に残したかった。十一次隊に頼むつもりだったが、時間がなかったし、まだ十一次隊にはそんなムードがない。それはともかく、我々の共通の女性が出来たことはとても嬉しい。」(笑い)

近藤老人入室。

安藤「意外な人が意外なほど関心を持っている。」(笑い)
近藤「意外な人とは何事だ。俺にも権利がある。」(笑い)

鈴木

「前に美香ちゃんからの電報で、まだ日本短波放送の司会が決まらないから応援してくれ、と言ってきた。また、今年には南極向け短波放送の時間帯がずれて、基地では丁度電波状態が悪い時で、全然聞くことが出来なかった。こういった問題が起きた場合、日本で誰か言い出す人がいないと解決されない。組織の必要を感じました。」

成瀬

「以前は、南極向け放送を彼女一人でやっていたから、

『南極の美香』であった。しかし現在は、司会業その他タレントとしての活躍を始めている。つまり、スタイルを変えて今再出発したところだ。だから、彼女は南極だけの後援会ばかりではなく、内地においてもタレントとしての青木美香後援会をも期待しているのではないでしようか。」

小元

「それは美香ちゃんに会ってから考えれば良い。」

村上

「会うまでもなく、美香ちゃんはそういうのを期待しているのは分かっている。ただ、そういう後援会を俺達の手でやれるかどうかが問題ですよ。」

成瀬

「確かに、普通の後援会と同じような事を我々が出来るかどうかは大きな問題ですが、技術的な面は後にして、今は青木美香後援会の最も望ましいスタイルは何か、という点で話し合って頂きたい。」

近藤

「後援会が南極から離れるなら、内地の普通の後援会と変わらなくなってしまふ。だけれども、日本で南極関係者が彼女の後押しすることは、たいへん微笑ましいね。」

安藤

「もし、美香ちゃんが非常に有名になって、大きな後援会が出来たとしても、我々はこういったもんには入らんところや。我々は、『南極の』青木美香後援会だ、というプリンシプルを持つと。」

近藤

「南極青木美香後援会の名が良いが、事務所を極地部に置いた方がまとまりが付くんじゃないかな。我々が南極に出ている間も、極地部は美香ちゃんと接触する機会が多いし、そういう意味で、極地部にやってくる人がいるというが……。」

安藤

「楠さんに事務局長をやってもらったらどうや。」(笑い)

小元

「隊長は名誉顧問です。やっぱり名誉顧問がいいんじゃないですか。」

蜂須賀

「極地部が頼まれたからじゃやろうか、というのでは、質の良いものがやれるかどうか問題やと思う。スタイルはどうあれ、やる熱意が大切や。ポーリンのような熱意ある人がやっていかないとうまくいかんと違つかない。」

成瀬

「一つ心配な事は、南極青木美香後援会という限定したものにした場合、彼女が南極の放送を下りた時、我々とのつながりがなくなってしまうが…」。

安藤

「放送を下りることは充分ありうる。その場合、マジメな意味では後援会を止めるべきだ。それは必須の運命や。後は、十次隊の中で美香後援会が出来るなら、出来てもよい。」

小元

「四月一八日の浅間温泉での解散会に美香ちゃんを呼んで、私としては、そこで後援会の区切りをつけたいと思っと思っています。」

安藤

「十次隊の後援会ではないんだぞ。南極後援会なんだから解散する必要はない。美香ちゃんが放送を下りるまで続けるべきだ。」

小元

「十一次隊が引き受けてくれないと困るのですが、私としては、事務局は昭和基地に置き、我々は日本に帰って解散するつもりでした。」

木村

「十一次隊と青木美香との結びつきはどんなものだろう。」

村上

「南極の放送が三人になったので、我々ほど美香ちゃん美香ちゃんと熱を上げなかったでしょ。」

小元

「美香ちゃんが各家庭を回って、声の便りを送ってくれたのは、本当に感謝感激でしたね。」(笑い)

蜂須賀

「我々が育ててきた後援会を十一次隊に引き渡して、我々は四月に入って解散してしまうというのでは、一寸淋しい。第一、十一次隊は受け入れるような雰囲気ではない、と思う。」

近藤

「ポーリンの言うのは、事務的な事は引き渡すが、会長を下りるつもりはないんだろ。」

小元

「いや、会長は四月で止めます。」

村上

「止めなくていいよ。」(笑い)

小元

「南極にあつてこそ後援会は良いけれど、日本に帰れば俗っぽくなって嫌ですネ。」

村上

「解散なんて言わないで、残しておけばいいじゃないですか。何かの集まりがあつた時は、美香ちゃんを呼んだりしてさ。」

安藤

「ミ―八雑誌の週刊平凡あたりに、美香ちゃんと皆で撮つた写真を載せようやないか。」(笑い)

小元

「木村カメラマン、よろしくお願いします。」(笑い)

木村

「日本に帰つた場合、後援会って言つたって、一体何が出来る?」

成瀬

「物質的には何も出来なくても、彼女とある種のつながりがあるというだけでも、良いじゃないですか。」

木村

「つながりだけなら、今までも前の隊が解散会に呼んだり、いろいろ接触はあつた。何も出来なかつたら、後

援会じゃないじゃないか。」

成瀬

「そしたら、後援会という名前をやめたら良い…。」

近藤

「友の会とか、ハゲます会とか…。」(笑い)

安藤

「町の後援会だつて、殆ど何もやってないだろ。」

村上

「幹部は一生懸命やっているんだよ。」(笑い)

蜂須賀

「普通の後援会と同じようなものにしようという訳ではないが、美香ちゃんのウシロには全十次隊員達が応援しているぞ、という程度の後援会なら我々にも出来る。」

成瀬

「そろそろ、具体的な方向に話を進めたいと思います。後援会を十一次隊に残して置く、という意見の方が何人かいましたが、技術的には、今からでは難しいと思います…。」

安藤

「それは隊長に頼んで、日本から電報なり電話なりで話

をつける。十次隊は解散などと言わずに、会員として残れば良い。会員であっても、別に縁談に差し支える訳じやなし…。(笑い)

美香ちゃんが南極の放送を止めた場合は、自然解消的になくなる。それはしようがない。後は、有志の個人的な付き合いだ。」

成瀬

「十一次隊が非常に乗り気であってくれれば良いですが、庶務引き継ぎと同じように、事務的に受け渡すのでは主旨に反する。」

安藤

「引き継ぐからには、会誌の発行ぐらいはやってもらう。十一次隊が引き受けない場合は、我々が死に水を取らにやいかん事になるだろう。」(笑い)

小元

「そうですね。いろいろ問題があるようで、再考の余地がありそうですね。」

成瀬

「では、最後に全般的な事について、皆さん一言づつお願いします。今日のテーマの後援会の将来について、具体的な結論を含めて頂けると、なお良いですが…。」

蜂須賀

「こういったものは、ゲイグイ引つ張っていく人がいないとうまくいかない。十一次隊に引き渡して、我々の任務は終わりです、というのでは尻つぼみになってしまいうに違いない。十次隊が初めて作ったのだから、十次隊のメンバーが中心になってイニシアティブをとって、精神的なバックアップだけでも良いから、美香ちゃんが死ぬまで我々が続けていくべきだと思う。」

鈴木

「後援会が出来たせいではないでしょうが、青木美香というタレントが生まれ、売り出してきたという事は嬉しい事です。必ずしも十次隊がやれという訳ではないが、南極OBが中心になって後援会が発展していけば、大変結構だと思う。一応続けていったら良い。」

近藤

「何かの形で残すことは賛成。本部は昭和基地に置くべきだ。事務的な活動は極地部で。南極の昭和基地に青木美香の後援会がある、という事だけで良い。」

安藤

「近藤さんと同意見。」

木村

「後援会というからには、何かしなければならぬ。十次隊だけでは数が少ないし、日本に帰れば力が無い。南極関係者と話をし、十次隊が中心になって、後援会を拡げていくべきである。」

村上

「後援会を大きくするのもよし。南極に置くのもよし。でも、せっかく出来た十次隊二九人と美香ちゃんとの太いつながりだけは残したい。」

小元

「とにかく作ったからには、そう簡単になくす事は出来ませんね。美香ちゃんと我々との真心のつながりだけは、永遠に心の片隅に残して置きたいと思えます。」

成瀬

「どうもありがとうございました。」

(本座談会の編集に関する責任は、成瀬にある。)

編集部より

次号は三月上旬発行を予定しています。会員諸兄の投稿をお待ちしています。

往復信記録

二月三日受信 小元会長、御一同殿

才元氣デスカ美香デス「ズイブン遅レテ今日電報受ケ取リマシタ」御無事デオ帰リオメデトウゴザイマス「早イモノデモウスグオ会イデキマスネ」最後マデ皆様才元氣デ「ナオ後援会ハナクナルノカシラ」

二月十六日受信 十次隊御一同殿

才元氣デスカ美香デス「羽田ヲ楽シミニガンバツテイマス」鈴木前田小元成瀬村上他皆様イロイロアリガトウゴザイマシタ」

二月二十一日発信 青木美香殿

想イ出多イ昭和基地ヲアトニ懐カシイ日本ヘノ旅ガ始マリマシタ「一年四カ月ブリニ激動ノ社会ニモドルコトハ不安モアリマスガ一カ月後ニ懐カシイ人達、トリワケ美香チヤンニオ会イ出来ル事ハ大キナ喜ビデス」サテ二月一日ヨリ楠名誉顧問ノモト、小元会長、成瀬事務局長ノ新体制トナリマシタ「四月一八日、浅間温泉ニテ解散会ノ予定、オ友達ト共ニ是非ゴ参加下サイ」後援会一同

雑感

青木美香嬢は、十次越冬隊に対して偉大な貢献をした。南極放送で声の便りを送ってくれたから、そう言っているのではない。長い冬籠りの期間、基地の食堂で、バーで、内陸のカブースの中で、非常に度々話題になってくれたからである。アルコールが入れば話は女性の事に移るのは、自然の成り行きであろう。自分の女房、女友達、初恋の人、汽車の中で幸運にも隣りあった不思議な女性、そういう話をサカナに楽しくウイスキーやカクテルを飲んだものである。

しかし、日本各地からばらばらに集まって来た隊員の中には、共通の話題と成り得る女性は非常に少ないのである。映画に登場する新珠三千代や佐久間良子は、確かに我々の共通の女性ではあったが、色気があるとか、身体の線がきれいだとか喋ったとしても、それはそれだけの事である。そこで身近な女性としてクローズアップされたのが、青木美香さんであった。

どんな風に彼女が話題になったかは、ここでは問題としない。ただ、快く我々のサカナになってくれた事に對して、我々は感謝しなければならぬ。

(成瀬)